

tokyo 古田 news

第2号

昭和60年7月

古田武彦と古代史を研究する会

☎03-542-7456

〒104 東京都中央区銀座7-18-13 銀座スカイハイツ710号 ACT内

老岐一郎氏講演会

老岐一郎氏の講演会が、今年も東京で行われる。時は8月3日(土)午後1時30分～5時。所は港区勤労福祉会館(国電田町駅から徒歩3分、地下鉄三田駅のすぐ上)。タイトルは、「邪馬台(台)国・扶桑国を探る」です。どんな話が飛び出するか、ふるってご参加下さい。五百円です。

沖ノ島・対馬の旅

5月3日、まだ真つ暗闇の午前4時半、沖ノ島へ行くためチャーターした漁船は、大島の港を出発した。船倉にもぐりこんで眠っていると、皆のざわめきで目が覚めた。甲板へ上がるとどうだ。空は晴れ、海は鏡のように風いで、目の前には沖ノ島が見えている。

思ったより大きく、緑に包まれている。手前には小屋島が。大急ぎで弁当を食べたが、エンジン音を聞かせず走る漁船の足は速い。食べ終わらないうちに小屋島をすぎ、やがて沖ノ島の岸壁に到着した。

これからが大騒ぎ。浜でミノギをしなければならぬ。素っ裸になつて、右足の先を少し海につける。身を切るような冷たさだ。対馬海流は暖流のはずだが、この海は鬼のように冷たい。思いきって5メートルほど海に入り、えいっとばかりにしゃがみこんで首まで海水につかった。すぐ立ち上がった。後は岸辺へ一目散。うー、冷たい、冷たい。

中には膝までですませたズルい人もいたらしいが、神様のバチもあたらす、無事全員で山登り。絶海の孤

島には違くないが、巨大な岩礁のよなもの想像していたところ、緑のまぶしいちゃんとした島だった。これなら縄文、弥生でも、水さえあれば暮らせたらう。

沖津宮の祠の裏に、岩上遺跡の巨岩があり、その下の岩陰もまた遺跡である。すでに出土物は九州本土の資料館に運ばれているので、今は単なる巨岩にすぎないが、ここで祭祀が行われたのだと思うと、やはりはるばる来てよかつたと感じられた。

発掘は終わったことになっているが、この島、まだまだ他にも祭祀物の出土する所があるのではないか。帰りは島をゆっくり回り、それから船足を上げて、2時間静寂な海を暴走して大島へ戻った。沖ノ島の姿が目には焼きついている。

その日の夕刻、対馬空港へ降り立ったが、宿までの道が右へ左へ、上へ下へのもんでもない道である。21世紀も近いというのにこれでは、弥生時代はまさに「道路は禽鹿の径のごとし」であつただろう。

翌4日、海神神社の神宝を見た。神主さんが親切に、佐賀(サカ)で遺跡を掘っているから、行ってごらんになるとよいでしょうと言つて下さつた。そしてこれが今回の旅で一番の収穫になつたのである。

佐賀部落の一軒の民家が建て替へるといふので、古い家を撤去した後を掘っている。調査が終われば埋め直して、新しい家を建てるわけだ。対馬は山ばかりで人の住める所は限られていて、昔の遺跡はすべて家の下にあるというわけである。掘っている場所はほとんどが縄文後期

の遺跡だが、南隣の家に近い部分は縄文中期、北隣の家のそばは貝塚になつている。建て替へをしない家を取り壊して発掘するわけにはいかないが、学術的には惜しい。

調査の指揮をとつておられたのは長崎県教委の正林先生。古田説もよくご存知の様子で、この出土物は北九州や朝鮮半島南岸部との共通性が強く、対馬海峡文化圏を想定できると語っておられた。



従来の常識ではどうにも説明がつかせんとおられたのが、三陸地方と共通する様式の骨角器で、考古学の常識は書き換えられるかもしれない。それから二ヵ月後の7月上旬、青森県で縄文晩期の地層から髙状三足土器が出た。これは中国の殷の時代の影響ではないかと、今学界は大騒ぎだが、佐賀遺跡の成果と考え合わせると、対馬海流が文化を運んだとみてよいのではないだろうか。対馬は単に朝鮮・九州間の通り道ではなく、文明の十字路だったのであるまいか。

5日は暴風雨。しかしなんとか飛行機は飛んで、予定どおり帰京することができた。参加者は皆、沖ノ島や対馬の風光、古田先生のお話に満足したことと思う。私は対馬空港の荷物検査係の女性が一番印象に残っております。

(田島芳郎)

大阪の会との交流

6月23日、所用で大阪へでかけた折、「市民の古代研究会」(旧「古田武彦を囲む会」)の藤田友治事務局長を訪ね、わが会との事務折衝を中心に交渉を行った。という真面目な一方のようだが、実際は藤田氏宅で3時間半にわたり、ビールを飲んでいた次第。4年前に古田氏や藤田氏夫妻ら、「囲む会」の人達と韓国古墳や博物館を訪れたことを思い出し、談論風発であった。

ことのついでに、「市民の古代研究会」の内情も教えて貰ったが、一番感心したのは非常にきっちりした運営を行っていることだった。幹事間の連絡も頻繁であり、会計は講演会をはじめ本の発行、機関誌、古墳旅行、文献講読会等、すべての部会が独立採算で経理をしている。あまりきっちりしすぎて息がつまるのではないかとも思ったが、わが会は鷹揚にすぎるので、見習うべき点は見習いたいと思う。

藤田氏は今年1月の特別講演会で前半の講師をされたので、会員の皆さんもその温顔に接せられたはずだが、内に秘めた闘志は烈火のごとくであり、好太王碑の開放にはもつとも功績のあった人である。すでに10年以上前からこの問題に取り組まれて、碑の学術調査への道を開くため何度も訪中して交渉された。藤田氏が秘書長となつて訪中した東方史学会(古田团长、山田宗睦副团长ら21名)は、4日間にわたつて現碑を精査する機会を与えられ、長春では王健群氏との2時間にわたる討論も実

現した。藤田氏の熱意が実つたと言えり。

東方史学会は好太王碑開放への交渉のために形を作つたもので、実質的には役目を終えたわけだが、名義的には今後の訪中に役立てたいという。

「好太王碑調査団」の記録上映会

日時 七月二十八日(日) 一時〜四時
場所 文京区民センター3C会議室
内容 ①「好太王碑調査団の記録」
②「好太王碑研究の現段階」
講演 藤田友治

会場費 五〇〇円
問合せ 市民の古代研究会

関東連絡所
☎〇三一一八五―四一三三八

倭人伝の解釈について、私なりに古田氏へ疑問を呈したい。

① 韓国内は全陸行か。
韓国を西北から東南へ横断すると仮定してみると、小白山脈を越えてからは洛東江沿いの低平地である。洛東江は水量が多く、高低差もほとんどない大河であり、ここは船で下るほうが遙かに早し楽だと思ふ。

② 対馬、奄岐は陸行したか。
狗邪韓国と末盧国間は同じ船で渡つたと考へるほうが自然ではなからうか。また対海国の方四百里、一大国の方三百里は、どうやって測定したのだろうか。対馬は全島が山また山で、歩いて見当をつけるのはかなり難しい。むしろ船上から島を見て

およその長さを目算するほうが容易であろう。古田氏は、島めぐり読法は机上の計算値であつて、実際に魏使が行動した経路とは限らないと言われる。しかし行程や距離が、ある場合は実定値、またある場合は机上の計算値といふのはおかしい。何度か使節が倭へ行つておるのだから、復命書に基く実定値であろう。



③「千余里」は同一か。

古田氏は中国人は陸上民族だから海は苦手で、狗邪韓国と対海国と一大国と末盧国の三つの渡海を、すべて千余里にしてしまつたのだと言われる。余に一から七までも表す例があることを、坂田隆氏が例証しておられるが、地図上に糸を置いて計つてみると、馬上または釜山から巨濟島沖を通つて対馬の豊玉までが千六百里、豊玉から対馬南半の西岸を通

つて奄岐の勝本までが千四百里となる。勝本と唐唐は千里にしかならないが、流れの具合で多少は変わつてくるだろう。千余里も実定値であると考えて悪いとは思えない。

④不弥国は姪ノ浜か。

伊都国と不弥国の東行を實際の行路とすれば、直線距離で百里の姪ノ浜へは至るまい。しかも途中には長垂山の山塊があり、海岸沿いに断崖を行くのは不自然だから、南側の谷間を進めば室見川流域の早良平野へ出てしまふ。不弥国は投馬国への水行の出発点であり、海岸に面していると考へられるので、距離的に可能性があるのは今宿だけである。今宿部落はおそらく弥生期には海中だろうから、今宿青木部落あたりであろうか。そうすると、「南、邪馬一國へ至る」先は、必然的に室見川流域ということになる。長垂山の東側は下山門だが、ヤマトをヤマの入口と考へると、これもびつたりする。

⑤周旋五千余里はどこか。

古田氏は周旋五千余里を、狗邪韓国と邪馬一國間だとされる。一万二千余里から、郡と狗邪韓国間の七千余里を引いたものだという。では狗邪韓国までに倭地はないのだろうか。海岸線から倭地なのか。またこの周旋の記事が、倭種の国や倭儒国の記事の次に位置しているのをどう説明されるのか。使節は傍線行程として水行二十日、投馬国へ行つておる。その途中で東岸の四国、女王を去る四千里の地に、倭儒国を見たのである。そして周旋五千余里なのだから、これは投馬国への水行二十日と考へるべきではないか。(田島芳郎)

ことばの考古学

武蔵野市 毛利 一郎

地震の後、木の芽起しの雨となり（因幡なお）という現代俳句の地は、詩語にしか使われぬ古語で、単なる土地という意味しかなかったが、古代では大国主の別名オオナムチ、その国作りに協力したスクナヒコナ、すなわち少名毘古那（紀では少彦名）の神名に見るナ、名、那で、ゆゆしい内容を持つ。それは稲作農耕開始の黎明期に美田を作るため人工を加えた土地であり、美田の出来る奇しき土地、すなわち奇土、すなわち大国主の国がオオナムチのナに対応する。国の原義の奇土は現代語では「クニのおふくろ」というような場合が最も近いが、やがて小さな国家的存在に転化する。田中重雄氏著「紀州の歴史と文化」に、那賀、名手のナは朝鮮古語のナで、土地または小国家を表わす、とあるのは、ナがクニと同様、小国家となった消息をとらえている。奇土としてのナは、稲の古形イナ、米の古形ヨナに共通する語幹ナと同源かと思われる。広辞苑はナを地、土の意としているが、土というものは古代人にとって何よりもまず稲を育てる土であったろう。そういうナの実態はどんなものか。葦原中国、豊葦原瑞穂国に共通する葦原は湿地で、人が住めたものではないが、稲作の導入とともに水田の適地となる。最も容易に水田が出来るのは平野部の水辺、すなわち葦原であったろう。その土木工事において杭こそ新鋭の土木機材と指摘したのは益田勝美氏著「古事記」で、登

呂遺跡の溝（人工の水路）あるいは水田の畦畔を板杭や棒杭で固めた工事が例示される。その杭を神格化した角杙の神、その妹活杙の神が古事記の冒頭に登場し、大物主神が丹塗矢となつて求婚したセヤタラ姫の父、三島の渥洲は溝の杭の意である（益田氏説）。このような杭によつて改造された土地こそナであつたらう。なお登呂遺跡のトロという語は、瀨八丁、長瀬という地名の瀨という漢字の通り、河水が深く流れる静かな所（広辞苑）で、水量の豊かな所であつたらう。

筑紫の国生み神話には天の瓊予と力による征服であつたことを示すに對し、出雲の国引き神話に登場するのは鉏と綱と杭で、出雲に剣がなかったわけではあるまいが、平和的な農業建設機材のみが出て来るのは、大国主が豊かなナを造成するための指導者であつたことを示す。そういうナは筑紫矛による征服の好対象となつたであろうが、葦原で奮闘する強い男、すなわち葦原醜男は大国主の別名であつた。

国引き神話の「かくて堅め立てし加志は石見国と出雲国との界なる、名は佐比売山、是なり」（出雲風土記）というカシは綱をかけて舟をつなぐ杭と解されている（日本古典全書）が、「堅め立てしカシ」と言い、一本の杭の縁の佐比売山と言ひ、一本の棒杭の感じではない。登呂遺跡のナを固めた幅広い板杭を含むイメーシが強い。大阪府三島郡で土木用の杭をカセという（沢瀉辞典）のは三島のミゾクヒを想起させる。カシとカ

セは転音の関係にあり、手枷足枷のカセはカシの転（広辞苑）である。舟を束縛するカシと手足を束縛する枷は意味の上でも転じうるであろう。

余談だが、古代のカシは東京築地の角河岸につながつていてと思う。河岸の河は当て字で、そのカシは舟をつなぐ杭から舟をつなぐ岸に転義した。三重県北牟婁郡では岸をカセという（沢瀉辞典）。

国引き神話にリフレインのように繰返される「童女の胸鉏取らして大魚の支太衝き別けて 波多須須支穂振り別けて 三身の綱打ち掛けて 霜黒葛間耶耶に 河船の毛曾呂毛曾呂に 国来国来と 引き縫へる国は……」には、童女の胸のように広い鉏（金へんの漢字は金属製の意か）と三本綱（日本古典全書の解による）が登場するが、このリフレインには、葦原を開拓して豊かなナを造成する土木工事のイメージがあるのではないか。大魚のキダ（鰻）を衝き、屠り（穂振り）という漁業民の過去のイメージと、段（分とも）を築き別け、葦原のすすきの穂を別けて、三本綱で河船（海の船でない）ことに注目。その河の水辺における土木工事の材料運搬（か）を人工の水路にそろそろと引入れる農業民のイメージが二重映しになっているのではないか。段と切れ目の意（沢瀉辞典）で、階段を段梯という例（広辞苑）もある。段は後に一町歩の十分の一という地積の単位となつたが、元来は田を築き別けた一區画を言い、広狭各種の段があつたであろう。九州の地名大分の古形オホキタは大段（分とも）の清音で

あるが、木田、喜多、北、大北などという地名も古代の支太につながつていよう。

古事記に「大穴牟遲、少名比古那と二柱の神相並ばして此の国を作り堅めたまひき」とあるスクナヒコナは恐らくスクのナ、日子のナであつて、日子のナが単なるナの美称だとすれば、固有名詞部分はスクだけである。現在、弥生銀座といわれるほど豊富な弥生遺跡が発掘されている地名に筑紫の須玖（福岡県春日市）がある。スクナヒコナがこの須玖の神だつたとすれば、筑紫の神が大国主に協力したということになる。その時期は天孫族の筑紫上陸（いわゆる天孫降臨）以前ということになる。スクナヒコナが登場した時、だれも知る者がなかつたのに、久延毘古（二本足の案山子）だけが知っていたというのは、稲田と案山子の関係がイメージされる。須玖にはすでにヒコナと美称されるようなナがあり、稲田があつた。そのようなナの建設の経験者であつたからこそ、スクナヒコナは大国主を助けることが出来たといえよう。博多の古名は那津または那大津、その後背地は隈県（現在の福岡県筑紫、早良、粕屋の三郡にわたる地域）（広辞苑）、対岸の韓地にはミマナ（任那）がある。

さらに高天原すなわち宍岐対馬（古田武彦氏説による）、中でも宍岐であろうが、そこにもナがあつた。古事記における宇氣比（記では誓約）の場面、「天照大御神、まづ建速須佐之男之命の佩ける剣を乞ひ度し、三段に打ち折りて、ぬなとももゆらに天の真名井に振り濺きて、

さがみにかみて、吹き、乗つる気吹の狹窄に成れる神の御名は……とある天の真名井の真名は、任那のマナと同じくナの美称であろう。紀には天沼名井ともあり、又は玉であるから玉名と美称されるナに、恐らく灌漑用を兼ねる井（泉または流水をくみとる所「広辞苑」）があつたものと思われる。玉名は市郡名となつている熊本県の玉名があるが、ナという地名は、そのほか新名、桑名、菊名など各地にいろいろあるだろう。

稲作が発展するにつれて山間溪谷地帯でも田を作るようになる。ヤマタノオロチ退治の神話で、スサノオは出雲の肥の河上で櫛名田比売（紀では奇稲田姫）と出会った。このような山間に田が出来るといふことは古代人にとっては文字通り奇しき稲田であつたろう。そういう山間の奇稲田がスサノオに結びつくすると、大田主が葦原に田を開いた時代より、スサノオが後ということになるが、それはさておき、奇稲田姫の老父母、アシナツチ、テナツチは足の神、手の神の意で、山間溪谷地帯の湿地における古式の耕作法が表現されているとするのは、前記益田氏である。足の神は、そういう泥田に大足（板製の大型の足駄）を履いて、刈り草、木の葉、小枝、去年の古株や稲茎などを踏みこむ男の重労働。手の神は、早乙女となって苗をとり苗を植える根のいる女の働きである。そこはタバ（山中の平地で奥まった所、ダバとも「広辞苑」と呼ばれる地形で水抜きも出来、苗の移植（田植え）も出来るので、それより山奥の、いわゆる小山田より収穫量が多い。そういう

法興元年

東京都板橋区 石川 信吉

うタバに建設されたナは、タバナと呼ばれたものではあるまいか。三國史記の新羅本記に、新羅第四代の王脱解は「本、多婆那国の所生なり。其の国は倭国の東北、一千里に在り」という記事を古田武彦氏が紹介された。このタバナ国は、山間のタバに奇稲田を作った国ではあるまいか。（この項につく）

かいつまんで九州年号干支紀年について述べます。天保七年（一八三六）鶴峯成申は「襲国偽借考」で、「法興元年は崇峻天皇の四年辛亥なり、然るに今記する処とあわず疑ふべし」と書残した。私も疑つたので「倭国年号紀年修正表」を作り、熊本市の平野雅曠様に送り御批判を仰いでいます。鶴峯の崇峻四年辛亥は年表で五九一年です。これを法興元年辛亥、五九三年と修正したものです。理由は日本書紀と倭国年号（旧紀）は干支法の差で「紀」が一年引上つています。更に天武元年（旧紀の癸酉）を壬申にしたためもう一年引上げられたからです。「旧紀」の天武元年是六七四年、「紀」では六七二年です。「紀」はその儘、記事を二年引上げて何々天皇何年として約一三〇年程の天皇紀を書き、倭国の明要年代に本来の一年年差に戻しています。従つてその中間である法興元年も二年引上げられていたのです。鶴峯は「紀」の干支で推算して崇峻四年と考えたのです。これを修正すれば法興元年是「紀」の推古元年と同年となります。倭国年号干支は好太王碑干支と同じ

干支法に属しており、世紀前から一貫して変つていません。後世の史書である「紀」が既にあつた旧紀をもとにして、干支を二つ上つてある干支で「是年太歳辛亥也」などと書くものだから鶴峯もこれに従つた訳です。定義的にいえば「書紀」は天武紀から欽明紀まで二年引上げて、隣国の「三國史記」は一年引上げて紀年を編年しています。「旧紀」（倭国年号）に対してです。現在まで取捨された九州年号資料と照合すれば誤記を除いて全部、明要以降、朱鳥三年までの間「紀」に対して西紀年（共通尺度紀年として）二年引下げれば良いのです。

紀年を修正してみれば、この法興元年是百済王廿七代威徳の卅九年・壬子（五九二）と同年の五九三年になります。威徳はこの年、改元して建興としました。（『東亞漢韓大辞典』一九六四年刊・未亜出版社・所収）建興（歴史）百済の年号・威徳王三九（五九二）から四四年まで。この威徳は即位の年にも倭王に金銅仏を贈呈した人で、仏教普及のスポンサーのような人です。示し合わしたかのように建興と改元し、倭王タリシホコは即位して法興とした。古田会の人々にこの改元の意味を解明して戴きたいと思ひます。実は「紀」の紀年改訂は伴信友以来の未解決の問題だったので、それをそのまゝにしておいて、あれこれの文献考証を試みても所詮はかみ合わないのです。「紀」の干支紀年を唯一絶対の標準とすることはできないのです。刑法では疑わしきは罰せずとい

ますが、歴史はそういう訳に参りません。既に「書紀」が編纂公布されてから久しく、「紀」紀年は骨肉化しています。皇紀二千六百年は否定されませんが、まだ干支法の差と史書編纂による政治的紀年改訂だけが残されていて、未解決だったので、法興元年是引続き常色（大化）、白雉（白雉）へつながってゆくことになり

先生の近況

古田先生は7月7日に引越されました。場所は同じ本郷で、これまでの1DKから3DKに移られ、来春には奥さんも来られる予定。私も引越しの手伝いに行つたが、あらかた終つたところに顔を出し、昼食をごちそうになつて帰るといふ、とんでもない手伝いぶりだつた。それにしても本の分量が山のようにあり、1DKに納まっていたとはとても信じられなかつた。

8月は単身渡米され、ワシントンに6泊して、ベティ・J・メガース女史の案内でスミソニアンを訪れ、バルディビア出土の土偶を連日観察する予定と伺つた。その後すぐ竹野氏らと好太王碑めぐりして訪中という日程である。7月末には出雲の銅剣シンポジウムに出席される。

次回古代史講演会の予定

講師 古田武彦氏
テーマ 未定
日時 12月1日(日)
場所 未定
※テーマ、場所が決りしだいお知らせします。